

# 研修医の声

## 医療は、暮らしの延長上にある

厚生連村上総合病院

杉本 凌太郎

「地域医療」とは何者だろうか。厚労省は地域医療研修について「地域の特性や患者の日常生活に即した医療」と言及している。粟島での研修を振り返りながら、その正体に迫ってみたい。

粟島、人口約300人の無医離島——。診療所での診察だけでなく、健診や日常の何気ない会話の中で、医師は島の生活の一部として存在していた。患者さんから畑の野菜を分けてもらい、役場の方と釣りに出かける。その雑談の中で体調に関する軽い相談を受ける。そこには「医療を提供する側」と「受ける側」という明確な境界はない。困りごとを一緒に引き受ける存在として、医師がいる。

島から戻り救急外来で勤務していたある日、一人の高齢女性が粟島からフェリーで搬送された。悪性リンパ腫を背景とした腫瘍熱であった。入院まで担当させていただき、島の話で盛り上がった。息子様にも今後考えられる経過を丁寧に説明した。退院後、再び島を訪れた際に自宅へ伺うと、たいそう喜んでくださった。その後も貧血に対する輸血目的で定期的に当院へ入院されているが、別の科を回っているときも折を見て顔を出すようにしている。医療行為そのものよりも、関係性の継続が支えになる瞬間があると知った。

村上での外来でも、その感覚は残っている。感冒症状で受診した小学生がいた。医学的には数日以内の再診が望ましい状況だったが、小学校を尋ねるとさんぼく小学校だという。当院から車で片道50分。負担を踏まえ、条件付きでの再診とした。都会で研修していた頃、学校名や住所から通院距離を意識することはなかった。

これは地域医療ならではの視点なのだろうか。否、暮らしを含めて医療を考えることは特別なことではないはずだ。にもかかわらず、「地域医療」という言葉があることで、あたかもそれ以外の医



写真1 粟島から三度目の出航



写真2 役場の方に見送られての出航

療は暮らしと切り離されてよいかのように扱われてはいないだろうか。

初期研修も終盤に差しかかっている。専攻医となれば、より専門的で多忙な日々が始まるだろう。それでも、ここ村上で見つけた原点を忘れずにいたい。医療は、暮らしの延長上にある。